ユニバーサルデザインを利用した快適な養護学校の提案

a2200512　　金原　真奈美

【背景・目的】
・養護学校は様々な障がいを持つ生徒たちが1日の大半をすごす場である。障がいをハンディキャップと考えるのではなくひとつの個性として考えることができるような養護学校を提案したい。
この考えがきっかけとなり「ユニバーサルデザインを利用した快適な養護学校のデザイン」を卒業研究テーマに選んだ。
近年では全国的に障がい児が急増しており、また在籍児童の障がいの重度化、重複化、複雑化も目立つ。原因としては、医療の発達が挙げられるようで、以前であれば死亡してしまったり、寝たきりになっていた児童も学校に通えるまでの治療が行われるようになった。
・加えて2007年4月から盲・聾・養護学校は全ての障害の種を越えて特別支援学校という呼称に統一されることが決定し、心的障がい児やLD(学習障がい)の児童も積極的に受け入れていく方針となった。
このような全国的な動きの中で、特定の障害を選ばない施設の必要性が高まっていると感じ、その解決策としてユニバーサルデザインが有効であると考えた。
・また以前から、バリアフリー対策として車椅子用トイレやスロープ、障害者用特別席など健常者とは違う方法を提供することに疑問を抱いており、ユニバーサルデザインを活用することで差別感の無い空間を形成できると考えた。

【調査内容】
（1）文献調査
・ユニバーサルデザインやバリアフリー等に気を配った、先駆的な養護学校の事例を文献から調査する。
・全国的な養護学校の状況を把握し、若松市内の養護学校との比較調査としても利用。

（2）現地調査（会津養護学校・会津養護学校竹田分校・猪苗代養護学校）
・県内の養護学校(福島県立会津養護学校、福島県立会津養護学校竹田分校、猪苗代養護学校の3校)の現地サーベイ、ヒアリングを行い、福島県内の養護学校の現状を調査する。

（3）福島県立郡山養護学校における体験調査
・全国的にも有名であり、ユニバーサルデザインやバリアフリーデザインを積極的に取り入れ、審美的にも評価の高い福島県立郡山養護学校を今回の卒業制作の参考施設として細部にわたり調査を行う。
・文献調査、現地サーベイ、ヒアリングの他に、生活体験も行う。

【調査結果・考察】
・3つの調査結果から、現在の養護学校に必要とされているのは変化を受け入れることができる環境であると感じた。
文献調査では多くの学校で多目的に使えるスペースの有意義性に触れており、その点に関しては現地調査を行った会津養護学校、猪苗代養護学校、郡山養護学校も同様である。
・多目的スペースは変化を受け入れるための解決策の1つであると考える。
生徒の障がいが年々重度化、複雑化、複合化していることを郡山養護学校の体験調査により実感すると同時に、学校の造りがそれらの変化に対応できていない実態を知った。
・一番顕著であったのはトイレであり、おむつ交換用のベッドが、種類豊富に用意された便器の需要を上まわっている現状に対し、スペースの問題からベッドを設置できないトイレがいくつも存在した。
・伏位状で使用できるトイレや和式便所も設計当初は利用者がいた様であるが、現時点では全く使用されていない。
・福島県立会津養護学校では、児童の増加により教室、更衣室が不足しているという問題が挙がったが、この点に関してもやはり可変性の欠如が原因であると考えられる。
・体験調査により実感したこととして、1人1人介助方法が異なりマニュアル化できないということがある。
養護学校にユニバーサルデザインを取り入れる方法として、生徒に合わせた様々な介助方法を全て受け入れることが可能なデザインを提案していくことが適していると考えた。
・1日の中での変化、1年の中での変化、10年の中での変化といった、様々な時間軸のなかでの変化を受け入れていくことが、長期的に生活しやすい環境を生み出し、結果として生活する人々の快適性にも繋がっていくと考える。

①

②

③

①、②、今では使用する生徒のいない便器の数々。（郡山養護学校）

③、体育館より小規模な多目的スペース。（会津養護学校）

2006年度 卒業研究ゼミ発表要旨集

【提案内容】
・福島県立会津養護学校改建案という形で“ユニバーサルデザインを利用した快適な養護学校”の提案を行う。
・現在会津養護学校では主に知的障がい児を対象としており、小学部、中学部、高学部がある。
・また同敷地内に福島県立聾学校が併設してあり、聾学校のみ幼児部を設置している。
・今回の提案は会津養護学校のみの改装案とし、聾学校は含まない。

・また会津近辺には肢体不自由児対象の養護学校が無く、大体が知的障がい児対象としている。
・県内の肢体不自由養護学校は今回体験調査を行った郡山養護学校といわき市の県立平養護学校の2校のみである。郡山養護学校には猪苗代から通っている児童もあり、中間点である会津においても肢体不自由児を受け入れられる養護学校の必要性を感じた。
・会津養護学校は敷地も広く、周囲環境としては会津大学、ハイテクプラザ会津若松技術支援センター、白梅幼稚園が隣接している。
・閑静ながらも地域から孤立することの無い、養護学校には最適な敷地であるため、新たな場所での設計を提案することはせず、改建という形をとった。

【ユニバーサルデザインを利用した快適な養護学校の提案】

提案１・中庭型の教室配置
・障がいのある児童は内に篭りがちであり、意識的に外部環境に触れることが必要となる。
・郡山養護学校では中庭型の教室配置を取り入れ、生活の中で外部環境に触れやすいよう設計されていた。
・養護学校の場合、授業で校庭を利用することはほとんど無い。
むしろ中庭のような校舎内での外部環境が気軽であることもあり、有効に活用されていくと感じた。
・今回の提案でも中庭型の教室配置を取り入れ、生活する人が目や肌で外部を感じられるようにした。
・校舎に囲われた中庭の空間は車の通行や不審者等の心配も無く安全である。

提案２・学年毎のクラスター
・オープン・スクール形式での提案の中で、壁を全てなくすということはせず各学年がオープンスペースを共有するという形を提案する。
・小学部は各学年4クラス、中学・高等部は学部で5クラスずつ用意した。
これは現会津養護学校のクラス数より多い設定であり、学年毎の収容人数も会津養護学校より多くなっている。
・学年毎に教室とオープンスペース、トイレ(男子・女子)をワンセットとしたものをクラスターとし、中庭に沿って配置した。
これにより、学年同士の豊富なアイコンタクトを可能とし、生徒を多くの教師が見守るような構図をイメージした。
・各教室の仕切りは可動壁となっており、必要に応じて面積を変えられるようにした。
食事は2クラス合同で行うなど教室の受け入れ人数が多様に変化することが求められていることは体験調査により実感したことである。
・トイレが教室に隣接しているためアプローチしやすく、トイレ介助にかける時間の短縮を図る。

提案３・オープン・スクール形式の提案
・可変性に重点を置いて計画を進めた。
・特に各教室については様々な形式を取り入れ検討したところ、結果的にオープン・スクール形式が養護学校に適していると考えた。
オープン・スクール形式というのは教室の壁を取り払い、多様な学習活動が同時にできるような広い空間を中心に設計された学校を言う。
・伝統的な学校では多人数の生徒が時間割に従っていっせいに学ぶという形式が一般的だが、オープン・スクールでは個々の興味・適正・能力に応じた教育を実現するために生徒が自身のプログラムに従って学習するというのが基本理念である。
オープンスクール形式は教育方法やカリキュラム編成が自由であることが最大の特徴である。
・体験調査を通して、養護学校では時間の規制がゆるく、生徒の障がいに合わせたカリキュラムの下に授業を進めていることがわかった。
・また小学部では机上での授業はほとんど無く、むしろ体を動かす時間が多く設けられておりトランポリン等大きめの道具を用いることも多々ある。
・これら養護学校における生活パターンはオープン・スクール形式の理念に重なるものがある。
・また、この形式は可変性という点に関しても優れている。

提案４・小学部と中高部別のレイアウト
・1階部分を小学部、2階部分を中学・高等部とし、学部ごとのレイアウトを図った。
・現会津養護学校では特別教室についてはは全学年共用であるが、改装案では両階に同種の特別教室を設置し差別化を強調すると共に、移動の短縮化を図った。
・小中高と一貫し長期間同じ環境で成長していく生徒にとって、学部の差別化がより自らの成長を自覚することに繋がると考えた。
・上階の方法としてはスロープと2台のエレベータを選択できるようにした。